



環境公共 通信

“地域づくりの新しいかたち” 環境公共



第11号 平成23年12月
発行／環境公共推進会議事務局
〒030-8570 青森市長島1-1-1
青森県農林水産部農村整備課内
TEL 017(734)9545 FAX 017(734)8153

■最近の話題

東青地域 環境公共 現地研修会を開催しました

去る10月18日(火)、東青地域県民局地域農林水産部は、環境公共コンシェルジュやプロフェッショナル、市町村担当者が一堂に会した「環境公共」現地研修会を開催しました。

本研修会では、「環境公共」を進めるに当たって各地区の課題を解決するため、東青管内の農・林・水の各分野から1地区ずつ計3地区の公共事業を選定して、現地を視察しながら意見交換が行われました。

1. 外ヶ浜町 上小国地区（農業分野：ほ場整備事業）



ビオトープの視察状況

上小国地区では、ほ場整備を契機に労働生産性の向上と、高収益作物の栽培・加工・販売に取り組んでいます。また、平成20年度には環境公共推進協議会が設立され、ため池を再生したビオトープを中心に、動植物の保全活動を行っています。

研修会では、減農薬栽培に加え、ビオトープなどの取組による“きれいな水”のイメージを収益性アップにつなげていけないかなどの意見が出され、引続き検討していくこととなりました。

2. 今別町 大泊地区（林業分野：地域防災対策総合治山事業）

大泊地区では、風化や浸食により斜面の崩落が起きている急傾斜地を安定させる事業が進められています。

研修会では、対策工法として、立木を全て伐採して法枠を設置すべきか、それとも立木を残して斜面を安定化させた方が良いのか意見が交換されましたが、今後、地元の考えも尊重しながら議論を深めていくこととしました。



人家裏の急傾斜地の状況確認

3. 外ヶ浜町 平館地区（水産分野：漁港施設機能強化事業）



海藻の種子類付着効果を促進するブロック

平館地区では、漁港の安全性を高める防波堤の嵩上げや、被覆ブロック等の設置が行われています。

研修会では、県が管理する漁港施設において、地域住民がどのような活動ができるかについて意見交換が行われ、漁港・漁場を適切に保全していくためには水源林の役割を普及啓発する必要があるといった意見を踏まえ、今後、地元森林関係者との協働について検討していくこととしました。

■「環境公共」事例紹介

深郷田地区（北津軽郡中泊町） ～地域の水源林を守ろう～

1 地区の概要

本地区の森林は、水道（3,625戸で10,134人が利用）や農業用ため池（4箇所を合わせて21万トンを貯水）などの貴重な水源林となっています。

しかし、近年は、森林の過密化や手入れ不足のため、水源のかん養や土砂流出を防止するといった水源林本来の機能が低下してきました。



弥三沢溜池

2 水源地の森づくり

水源林を放置すると、日照不足により下層植生が繁茂出来ず、大雨等で表土が流出し、ますます荒廃が進むことが懸念されます。

このため、平成21年から3ヶ年計画で「水源流域地域保全事業」を導入して整備を進めています。

地区の協議会では、現地調査を実施し、参加者の意見を取り入れる形で、樹齢や樹高の異なる郷土種のヒバを使った複



協議会による現地調査



ヒバ植栽による複層林の造成

層林の造成により、日照不足の解消はもとより、森林の保水能力の改善にも取り組みました。

また、土砂の流出を防止するための丸太柵には、地元のスギ間伐材を利用し、環境への負荷を低減しています。

さらには、森林の維持管理に伴う労働力の軽減や作業効率の向上を図るため、作業道の整備も一体的に行っています。

3 今後の取組

水源林の整備は今年度で終了する予定です。今後は、この貴重な財産を将来にわたり保全管理し、その機能が十分発揮できるよう、協議会を中心に地域住民と県が一体となり、植栽木の生長を阻害する雑草の下刈りや、上層木の肥大生長に伴う日照不足を改善するための間伐などの維持管理を継続することとしています。



丸太柵工による森林整備



環境公共 通信

“地域づくりの新しいかたち” 環境公共



第12号 平成24年1月
発行／環境公共推進会議事務局
〒030-8570 青森市長島1-1-1
青森県農林水産部農村整備課内
TEL 017(734)9545 FAX 017(734)8153

■最近の話題

攻めの農林水産業 推進大会において 環境公共 をPR

去る10月31日(月)、青森県総合社会福祉センターにおいて、平成23年度「攻めの農林水産業」推進大会が開催され、農林水産業の関係者や消費者など約300人が参加しました。

推進大会では、県内において「攻め」の姿勢で生産や加工・販売に取り組み、収益性アップにチャレンジする優れた団体等の表彰のほか、農業・農村の持続的発展と活性化に関する基調講演とパネルディスカッションが行われました。



青山副知事による開会挨拶

環境公共 のPR



ブース前でポージングする決め手くん

備課と県内のコンクリート会社が共同で開発した環境保全型コンクリート二次製品水路「ハイ!アガール」で、水路に転落したカエルなどが実際にはい上がる様子などをパソコンの動画※で見てくださいました。

※動画は「環境公共」HPにてご覧になれます



水槽内に敷き詰められたホタテガイ貝殻の中で生息するナマコ

会場のロビーでは、ホッキ貝の資源管理や共同操業による収益性の向上等により最優秀賞を受賞した百石町漁業協同組合小型船部会による漁具の展示や、優秀賞を受賞した(有)ANNEKKOによる嶽きみの加工品等が展示されました。

「環境公共」のPRブースでは、県内の優良な取組事例の様子などをパネルやリーフレットで紹介したほか、県農村整



県産スギ間伐材を加工したコースター

また、県産スギ間伐材で作ったデザイン入りコースターを展示し、プレゼントしたほか、水槽でホタテガイ貝殻の中で育つナマコを紹介し、本県ならではの地域資源を活用した豊かな海づくりをPRしました。

■「環境公共」事例紹介

五戸ブドロク地区（三戸郡五戸町）

～ 地域の公共牧場をみんなで育む ～

1 地区の概要

青森県五戸町は、「あおり倉石牛」の産地として知られており、その生産拡大とブランド力向上を目指して、町営ブドロク放牧場を整備中です。

主な整備内容は、肉用牛繁殖雌牛の周年預託施設の新設、放牧草地の造成・改良などです。

これにより、肉用牛生産者は、春から秋の放牧預託に加え、冬期間も引き続き周年預託施設へ預託することで、個人で牛舎等への新規投資を行わずに規模拡大が可能となります。



ブドロク放牧場

2 活動内容



県産スギ間伐材を利用した木柵

ブドロク放牧場は、国道4号から新郷村方面へ向かう農道沿いにあり、一般通行者が景観の美しさから思わず車を止め、草を喰む牛の姿を眺めていることが度々あります。

このため、牧場管理者や五戸畜産農協などから成る本地区の環境公共推進協議会では、地域の公共牧場としてブドロク放牧場の管理を共同で行い、景観の維持向上に努めていくこととし、牧場の整備においても、できるだけ現状を変えずに、ひいんりん庇陰林^{*}を適度に配置するなど、環境を保全する計画内容と

しました。また、協議会は春の牧柵点検、放牧地への牛の入牧・退牧作業、放牧牛の衛生対策などを行っているほか、県産スギの間伐材を利用して、道路に面した牧柵の整備を行っています。

^{*}牛が暑熱時の日光や雨露を避けるための林

3 今後の取組

ブドロク放牧場の整備は、平成24年度で完了する予定ですが、五戸ブドロク地区環境公共推進協議会では、牧場の景観を維持していく活動などを充実させ、ブドロク放牧場と「あおり倉石牛」の結びつきを広く消費者にアピールすることで、ブランド力の向上を目指していくこととしています。

“ブドロク”の名前の由来

観音が現れたという霊場たる梵語の補陀落（ふだらく）のふは「ぶ」に、だは「ど」に転化した、観音信仰に起因して名付けられた信仰地名。（「倉石村誌」から抜粋）



倉石牛祭り



環境公共 通信

“地域づくりの新しいかたち” 環境公共



第13号 平成24年6月
発行／環境公共推進会議事務局
〒030-8570 青森市長島1-1-1
青森県農林水産部農村整備課内
TEL 017(734)9545 FAX 017(734)8153

■最近の話題

きれいな水循環フォーラム の開催

去る平成24年2月6日、青森国際ホテルを会場に「きれいな水循環フォーラム」が開催され、農林漁業者や食品製造業者、消費者、行政などの関係者約200名が参加しました。

本フォーラムは、青森県が全国に先駆けて取り組んできた「環境公共」を通じて、きれいな水を育みながら地域資源を活用した付加価値の高い商品づくりの取組を推進し、「環境」と「食料」の時代のトップランナーを目指すことを目的に開催されました。

知事が 環境公共学会 をPR

開会に先立ち、三村知事より食料供給県として持続可能な青森県づくりを実現するには「水」の役割が極めて重要であり、そのためには健全な水循環システムの再生・保全が必要であるとの説明がありました。

また、青森ヒバでできた「環境公共学会」の会員証を手に、「環境公共」の取組に共感した仲間たちからなる同会の取組をPRしました。



「環境公共学会」を紹介する三村知事

世永会長がパネルディスカッションに参加

知事からのあいさつに引き続き、基調講演とパネルディスカッションが行われました。

パネルディスカッションでは、NPO法人GROSSの福田専務理事をコーディネーターに、基調講演で講師として参加した(株)四万十ドラマの畦地代表取締役をアドバイザーに迎えるとともに、「環境公共学会」の世永会長をはじめとした4名がパネリストとして参加しました。



パネルディスカッションの様子



「環境公共学会」の世永会長

意見交換の中で、世永会長からは“きれいな水”を将来にわたって保全していくには、次世代を担う子どもたちに「水」の大切さを理解してもらうことが重要であり、それに向けた具体的な取組内容について紹介がありました。

最後に、畦地氏からパネリストの方々が連携し、活動の輪を広げることで更なる取組強化が期待できるのではとのアドバイスをいただき、盛況裏に本フォーラムは閉会しました。

■「環境公共」事例紹介

おおはたがわ

大畑川地区（むつ市）～ 健全な水循環の再生に向けた農・林・水の連携強化 ～

1 地区の概要

むつ市の北西部を流れる大畑川は、ヤマメやイワナ、アユなどの多種多様な魚類が豊富に生息する自然豊かな川で、地域住民の憩いの場となっています。一方、河川中流にある大畑頭首工に付帯する大畑魚道や、その上流にある薬研魚道では、施設の老朽化等により魚類の遡上が妨げられ、近年、大畑川上流での魚影が減少していました。

そこで、平成22年2月、大畑土地改良区の理事長を会長として、農・林・水の各関係者から構成された「大畑地区環境公共推進協議会」が設立され、平成22年度から大畑魚道の改修（県営大畑地区農業水利施設魚道整備促進事業：H22～25）に取り組むこととなりました。



現在の大畑頭首工（改修前）

2 活動内容



検討委員会による遡上調査

大畑川では、これまで上流で本協議会の構成員である林業者と漁業者の協働による水源林の保全活動や、下流では地域資源のホタテ貝殻を利用した魚礁の設置（広域漁場整備事業：H20～22）といった取組が行われてきたところですが、今回の魚道整備では、そうした取組と連携しながら官民一体となって“流域全体での生態系保全”と“健全な水循環の再生”を目標に進めていくこととしています。



第4回 大畑川魚道検討会

検討委員会で魚道の設計内容を検討

大畑魚道の整備に当たり、本協議会では、平成23年1月に大学教授などの専門家を加えた「大畑川魚道検討委員会」を設立して魚類の遡上調査を行い、魚道の形式や建設コスト、維持管理方法を検討したところ、全断面式魚道の新設と既設魚道の改修を行うこととなりました。

一方、大畑魚道の^{やげん}上流にある薬研魚道では、平成23年11月に、本協議会が直営でコンクリートの継ぎ目を補修しました。

3 今後の取組

大畑魚道は、平成25年3月の完成を目指して、今秋から工事に着手する予定としており、完成後は魚類のモニタリング調査を行うこととしています。

また、薬研魚道についても改修等を検討しているところであり、今後も農林漁業者が連携して“水循環の再生・保全”に向けた取組を進めていくこととしています。



協議会が直営施工で魚道の目地を補修

「環境公共」HP <http://www.pref.aomori.lg.jp/sangyo/agri/kankyokoukyou.html>





環境公共 通信

“地域づくりの新しいかたち” 環境公共



第14号 平成24年7月
発行／環境公共推進会議事務局
〒030-8570 青森市長島1-1-1
青森県農林水産部農村整備課内
TEL 017(734)9545 FAX 017(734)8153

■最近の話題

環境公共学会 の世永会長が野外学習会に参加

去る6月21日、つがる市立瑞穂小学校4年生51名を対象とした野外学習会「田んぼの水はどこから来るの？」が開催されました。

本学習会は、水土里ネット西津軽が主催したもので、農業用水と水源林の関わりをはじめ、農業農村整備、農業水利施設を維持管理している水土里ネットの役割などへの理解を深めることを目的に行われた農業水利施設見学会です。



出発式の様子

紙芝居を使った 環境公共 のPR

同校で行われた出発式では、「環境公共学会」の世永会長が「水循環と環境公共のおはなし」と題した紙芝居で、山～川～海を流れる水循環の仕組みと、健全な水循環システムの再生・保全を支える「環境公共」の取組について説明しました。

また、「環境公共」の取組に当たっては、①公共工事をする際の話し合いへの参加（地域力の再生）②農林漁業者が相互に協力（農・林・水の連携）③虫や魚が棲める施設の整備（環境の保全再生）といった3つの約束事を決めており、みんなもこれらの約束事を守って“きれいな水”に育まれた豊かな自然や美しい景観づくりに参加してみませんかと語りかけ、紙芝居を終了しました。



紙芝居で「環境公共」を説明する世永会長

水源林の働きを学習（in つがる富士見湖パーク）

紙芝居終了後、生徒たちはバスに乗り込み、「岩木川統合頭首工」「津軽ダム展望所」「白神山地ビジターセンター」を巡り、つがる富士見湖パークへと向かいました。



水源林の働きの説明を聞く生徒たち

ここでは、県の担当者から“地球温暖化防止”や“水源涵養機能”などの水源林の働きや、そうした働きを十分引き出すには、森林自らの力に加えて、植林や間伐などといった森林の成長を助ける人の力も必要であるとの説明がありました。説明を聞いた生徒からは“地球を大切にしたい”とか“水がいろんな所に循環していることが分かった”といった感想がありました。

この後、一行は最後の見学先である「平野揚排水機場」を見学し、学校で終了式を行いました。

■「環境公共」事例紹介

しょうがやち
菖蒲谷地地区（三戸郡田子町）

～ 未来へ引き継ぐ水源の森づくり ～

1 地区の概要

田子町菖蒲谷地地区には、772haに及ぶ町有林があり、地区内には「ドコノ森水源地」と「柘山水源地」という2つの貴重な水源地がありますが、近年、森林の荒廃から土砂の流出による被害が発生するなど、森林機能が低下してきました。

そこで、水源林の機能回復を目的に、水源森林再生対策事業（H23～27）による森林整備の取組を開始し、平成24年3月に地区住民や簡易水道組合、森林組合などを構成員とした「ドコノ森地区環境公共推進協議会」を立ち上げました。



地区の全景

2 水源林の保全活動

去る5月8日、協議会発足の記念行事として、ドコノ森町有林地で植樹祭を開催しました。協議会をはじめ田子町長や清水頭小学校の大黒森みどりの少年団など約50人が参加し、緑豊かな自然とのふれあいを満喫しました。



町長と団員児童によるシラカバの植樹



植樹祭に参加した大黒森みどりの少年団員

当日は、少年団代表から“植樹を通じて緑のダムである地域の水源林を保全していきたい”との力強い宣言後、森林組合の職員から植樹方法の説明を受けた参加者は、スコップを手に郷土樹種であるナナカマドとシラカバの苗木約40本を植樹しました。

植樹終了後には、“きれいな水”を育む水源林が地域の貴重な財産として将来にわたって確実に引き継がれていくことを願いながら、クリの木製の記念標柱を背に記念撮影を行いました。

3 今後の取組

本年度は、溪流への土砂の流出防止を図るため、県産間伐材を利用した治山ダムの設置や、森林が本来持っている保水力を回復するため、間伐による林内の光環境の改善に取り組む予定です。

また、秋には、協議会と地元小学生による「森の観察会」の開催も予定しているほか、今回植樹した地区での育林活動を通じて、森林を守っていくことの大切さを伝えていくこととしています。



植樹後の現地



環境公共 通信

“地域づくりの新しいかたち” 環境公共



第15号 平成24年9月
発行／環境公共推進会議事務局
〒030-8570 青森市長島1-1-1
青森県農林水産部農村整備課内
TEL 017(734)9545 FAX 017(734)8153

■最近の話題

環境公共 を支える技術に関する情報提供・視察会を開催

今回は、去る8月9日、報道関係者を対象に「環境公共」を支える技術のPRを目的として行った情報提供・視察会の概要をお知らせします。当日は以下の5つの技術を紹介しました。

1. 土壌硬化剤利用畦溝畔（青森市）

この技術は、酸化マグネシウムを主成分とした土壌硬化剤と土の混合土を、水路の溝畔などに貼り付けることで、土砂の崩壊防止や除草剤に頼らない雑草抑制を可能とする環境保全などの効果が高い技術です。特に高低差があって除草作業が危険な場所への施工が有効です。



白い部分が土壌硬化剤の使用箇所

2. 小水力発電（五所川原市）

青森県土地改良事業団体連合会では、昨年度、長橋ため池に全国初となる、ため池によるダム式の水力発電施設を設置し、実用化に向けた検証を行っています。年間で一般家庭6世帯分に相当する発電電力はすべて電力会社に売電し、その収入は農業水利施設の維持管理に充てることとしています。



ため池直下にある小水力発電設備

3. 地下かんがいシステム（中泊町）

本システムは、暗渠管を通じて、土壌中の地下水位を自在にコントロールすることにより、水稻の直播栽培の安定生産や、大豆などの転作作物の収量増をはじめ、水管理の労力節減が期待できます。本システムを導入して水田を経営している中谷保さんは、今後、様々な転作作物にも応用できると期待を膨らませています。

4. 複層林と丸太柵・丸太伏工（中泊町）

郷土樹種であるヒバを活用した複層林の整備により、“きれいな水”を供給する水源かん養機能が発揮されるとともに、間伐材を使った丸太柵工により土砂流出防止機能が向上します。また、間伐材を活用した丸太伏工は、法面からの植生繁茂を抑制し、刈払にかかる労力軽減が期待できます。



丸太柵工による森林整備

5. 藻場造成（鰯ヶ沢町）

本県初の試みである海岸事業による高潮対策と水産環境整備事業によるホンダワラ藻場造成の合併施工が行われ、日本海沿岸の水産資源の増大と生態系の維持回復を図る取組として期待されています。

県では、今後もこうした技術を活用しながら、着実に「環境公共」の取組を推進していくこととしています。

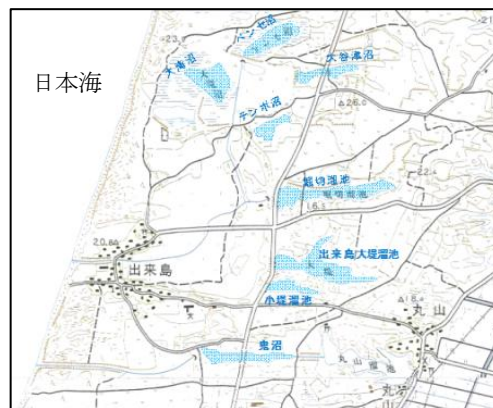


茶色部分が造成された藻場

1 地区の概要

つがる市出来島地区には、124haの水田を潤す水瓶として8つのため池があります。その中には日本自然百選にも指定されているベンセ沼があり、オオセッカをはじめとした多様な生物が生息しています。

ところが、戦後の開畑による森林伐採の影響で、出来島大堤ため池では土砂流入による堆砂が著しく、貯水量の確保が困難となっていたことから、ため池等整備事業（H21～24）で浚渫を行うとともに、平成21年8月には「出来島大堤地区環境公共推進協議会」を立ち上げ、“ため池環境資源を未来へ繋げよう”を合言葉に、生態系保全にも取り組むこととしました。



出来島地区周辺のため池群（8箇所）

2 ため池環境の保全・再生に向けた取組



ジュンサイの移植作業

具体的な取組として、協議会では「ジュンサイの移植」と「外来魚の駆除」を行いました。

きれいで澄んだ淡水の池沼に自生するジュンサイの保全を目的に、昨年11月、ジュンサイの根付きが良くなるよう、藁わらツトに泥だんごと一緒に包み、スコップで掘った植穴に移植し、今年7月には、環境公共プロフェッショナルの井上氏参加の下、協議会が移植状況を確認するため生育調査を行い、移植後の根付きが順調に推移していることを確認しました。



環境公共プロフェッショナルによる現地指導

また、ため池に生息する在来種を守る取組として、今年9月、鬼沼を対象に協議会メンバー、地域住民、地区の子どもたちの計70名が外来種のブラックバスを駆除しました。

協議会では平成21年度から駆除に取り組み、鬼沼では昨年に続き2回目で、今年は昨年より33匹多い45匹のブラックバスを捕獲しました。



ジュンサイの生育調査

3 今後の取組

事業による浚渫は昨年度で終了していますが、ため池環境資源を未来へと着実に引き継いでいくため、協議会が中心となってジュンサイの移植や外来魚の駆除を継続し、舟を浮かべた昔ながらのジュンサイの収穫風景の復活と、8つのため池がもたらす“きれいな水”で育まれた安全・安心な「出来島米」のPRに繋げていきたいと考えています。



外来魚の駆除作業



環境公共 通信

“地域づくりの新しいかたち” 環境公共



第16号 平成25年1月
発行/環境公共推進会議事務局
〒030-8570 青森市長島1-1-1
青森県農林水産部農村整備課内
TEL 017(734)9545 FAX 017(734)8153

■最近の話題

青森の農業農村整備を推進する集い2012 の開催

平成24年10月4日、青森市民ホールにおいて青森県土地改良事業団体連合会の主催により、「青森の農業農村整備を推進する集い2012」が開催されました。

本イベントは、元気のある農業農村づくりに不可欠な農業農村整備の推進を広く県民にPRするとともに、計画的な事業推進につなげることを目的に行われました。



パネルディスカッションの様子



パネリストとして意見を述べる世永会長

『女性の視点とパワーで豊かな農業農村を次世代に』と題したパネルディスカッションでは、環境公共学会の世永会長がパネリストとして「環境公共」の取組を紹介したほか、農業農村を元気にするためには“強いリーダーの存在”や“地場の資源や人財の活用”が必要であることを訴えました。また、他のパネリストからは、“農家は販売への工夫や努力が必要”“女性も大型機械の運転に挑戦してほしい”といった意見がありました。

会場入り口には「環境公共」展示ブースが設置され、パネル展示のほか、今話題の環境にやさしい小水力発電のミニチュア模型なども展示され、多くの来場者の目を引いていました。

当日は、大相撲の元小結の舞の海秀平氏による特別講演や八戸短期大学の客員教授である三村三千代氏による基調講演も行われ、会場は多数の来場者で埋め尽くされ、盛会の内に幕を閉じました。



「環境公共」展示ブースで小水力キットの説明を聞く舞の海氏

青森県農林水産基盤整備推進セミナー の開催

青森県漁港建設協会では、これまで企業の経営・管理能力の向上や技術力、漁港整備を巡る状況等について理解を深めることを目的に「漁港漁場整備事業推進セミナー」を開催してきました。



講師として「青森県の農業農村整備の推進方向」を説明する北林農村整備課長

同協会では去る11月9日、「環境公共」の取組推進と関係者の連携強化を図るため、初の試みとして農村整備建設協会との共催による「青森県農林水産基盤整備セミナー」を開催しました。

セミナーでは、「環境公共」のこれまでの成果や取組紹介、圃場整備に関する説明等があり、参加した漁業関係者は「環境公共」の推進が“きれいな水”の維持・確保につながり、持続可能で循環型の農林水産業に結びつくと共通認識を新たにしました。



■「環境公共」事例紹介

北三沢地区（三沢市）

～ 地域農業の再生と環境との共存 ～

1 地区の概要

北三沢地区は、三沢市北部の小川原湖と太平洋に挟まれた場所
にあり、国営三本木開拓建設事業（昭和41年度竣工）により干
拓された谷地頭地区の北部約100haにあたる水田地帯です。

本地区は、春から秋にかけてヤマセの影響を強く受ける稲作に
は厳しい環境であり、現在ではヨシ等が繁茂する遊休農地が増加
しています。

このような中、農業従事者の高齢化及び後継者不足も相まって
農村地域が衰退していく傾向を食い止めるため、大区画ほ場整備
を行うことで効率的営農と遊休農地解消を図り、担い手への利用
集積を促進していくことを目的として、平成22年度から経営体育成基盤整備事業を行っています。



北三沢地区の位置図

2 農業と環境の共存を目指した取組



オオセツカー斉調査の様子

本地区の東側にある仏沼は、もともと昭和の食糧増産の時代
に干拓された水田ですが、オオセツカの繁殖に適しており、国
内最大級の繁殖地となっているほか、多種多様で豊かな生物相
が確認されていることから2005年にラムサール条約に登録さ
れています。

オオセツカの繁殖への影響を最小限としたほ場整備を行うた
め本地区の協議会が出した結論は、「オオセツカの繁殖期の5
月から9月末までは工事を行わない」というものでした。

冬期間は気象条件が悪く、工事の実施には適さない時期ですが、工期の短縮などに努めながらこ
れまでに約6割の整地工事が完了しており、今春行われたオオセツカの斉調査では、全体数は微
減で、工事による直接的な影響は見られませんでした。

また、今年は地元農家の有志が組織した農事組合法人「フラップあぐり北三沢」が区画整理され
た水田で飼料米を直播栽培しました。工事で除去しきれなかったヨシ等に苦しみながらも、今まで
に例のない好天に恵まれたことで例年並みの収穫量となり、一同胸を撫で下したところです。

3 今後の取組

現在、残りの整地工事を行っているところですが、引き続き
周辺環境への配慮に細心の注意をはらい、同法人の「フラップ
（浮揚）」に必要な基盤整備を着実に進めていくとともに、環
境と共存した農地で作られた農産物としての付加価値化を支援
することで農家の所得向上を図っていきたいと考えています。



飼料米の生育状況



環境公共 通信

“地域づくりの新しいかたち” 環境公共



第17号 平成25年5月
発行／環境公共推進会議事務局
〒030-8570 青森市長島1-1-1
青森県農林水産部農村整備課内
TEL 017(734)9545 FAX 017(734)8153

■最近の話題

「きれいな水循環フォーラム」が開催されました

去る平成25年1月25日、青森市の青森国際ホテルにおいて「きれいな水循環フォーラム」が開催され、農林漁業者や農林漁業関係団体、食品製造業者、消費者、NPO法人、行政などの関係者約150名が参加しました。本フォーラムは、「健全な水循環システムの再生・保全」に向けた「環境公共」などの取組を一層強化し、「きれいな水」を育みながら地域資源を活用した付加価値の高い商品づくりを推進することを目的に開催されました。

開会に当たり、三村知事はあいさつで「水は生命の源。私たち一人ひとりが、きれいな水を守っていくんだという強い気概を持ち、健全な水循環確保に向けた主体的な活動を推進することが大事」と力を込めました。

1 基調講演

基調講演では、NPO法人アサザ基金の飯島代表理事が、アサザプロジェクトの取組を紹介しました。平成7年に始まったこのプロジェクトは、霞ヶ浦の湖岸植生帯の復元、外来魚駆除などを環境教育と一体的に流域全体で展開されており、「市民型公共事業」と呼ばれています。現在までに延べ22万人を超える地域住民、学校、企業、行政などの多様な主体が参加し、生物多様性の保全を通じて健全な水循環を維持・保全していくための新たな社会システムの構築が進められています。

2 パネルディスカッション

NPO法人青森県環境パートナーシップセンターの鶴見代表理事をコーディネーター、基調講演を行った飯島氏をアドバイザーに迎え、3名のパネリストが参加したパネルディスカッションでは、「きれいな水づくりで地域を活性化」をテーマに討論が行われました。パネリストの小川原湖漁協の細井総括課長は

「湖の貴重な水資源は、漁業者だけではなく高瀬川流域全体で守っていく意識づくりが大切」と指摘しました。



意見を述べる船越理事長（右）

また、NPO法人あおりふるさと再生機構の船越理事長は、住民の参加機運を高めるため「住民が地域の魅力を再認識し、住民の魂を入れた地域づくりにしないと意味がない」とし、成果を急がず息の長い取組が必要だと述べるなど活発な意見交換が行われ、盛況のうちにフォーラムは閉会しました。



あいさつする三村知事



飯島氏による基調講演



パネルディスカッションの様子

■「環境公共」事例紹介

地引地区(三戸郡南部町)～ 安心・安全で付加価値の高い農産物づくりを目指して ～

1 地区の概要

地引地区は、三戸郡南部町の北部に位置する沖積平野で、東西に1/500程度に緩傾斜した一級河川馬淵川左岸に拓けた水田地帯となっており、馬淵川を水源とする揚水機場で導水し、ほ場は小区画で地下水位も高い地域となっていました。

このため、平成23年度からほ場整備事業に着手しており、また、ほ場整備を契機として平成23年9月27日に「地引地区環境公共推進協議会」を設立し、環境公共に取り組んでいます。



ほ場整備事業「地引地区」

2 活動内容



平成23年度の田んぼアート

「地引地区環境公共推進協議会」では、福地クリーン米倶楽部や地引地区環境保全隊などの団体がそれぞれ独自に行っていた活動を「環境公共に資する活動」として連携して行うこととしており、特徴的な活動として、会長が率先して進めている減農薬・減化学肥料米の周知・販売を促進するため『田んぼアート』を開催しています。

田んぼアートでの田植え、稲刈は地区外の方々も参加しており、その様子は環境公共学会のブログにも掲載して紹介しています。

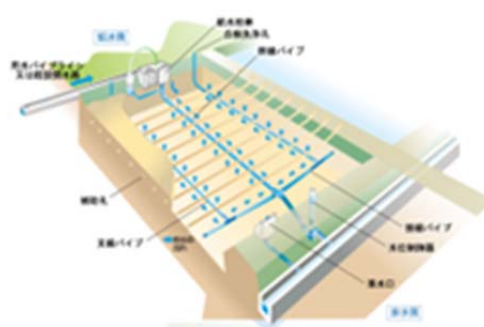
このほか、農地・水保全管理支払交付金を活用して、子供たちによる水路の「生き物調査」などの活動も行っています。



平成24年度の田んぼアート「稲刈」

3 今後の取組

今後、地引地区は地下かんがいシステム(FOEAS)を導入してニンニクなどの高収益作物の栽培を可能とするほ場を整備しながら、減農薬・減化学肥料栽培の促進による安心・安全で高付加価値の農産物づくりを目指して、田んぼアートなどの活動に取り組むこととしています。



地下かんがいシステム(FOEAS)



環境公共 通信

“地域づくりの新しいかたち” 環境公共



第18号 平成25年7月
発行／環境公共推進会議事務局
〒030-8570 青森市長島1-1-1
青森県農林水産部農村整備課内
TEL 017(734)9545 FAX 017(734)8153

■最近の話題

『「環境公共」の推進に資する“新技術”普及研修会』を開催しました

県では、去る平成25年2月20日、青森市の県総合社会教育センターにおいて『「環境公共」の推進に資する“新技術”普及研修会』を開催し、県内各地から約300名が参加しました。

本研修会は、県が実践・効果検証を行ってきた①土壌硬化剤（マグホホワイト）利用溝畔、②植生水路、③環境保全型水路（ハイ！アガール）、④地下かんがいシステム、⑤深暗渠、⑥反転均平工法及び⑦小水力発電といった「環境公共」を支える7つの新技術を、ふるさと水と土基金や農地・水保管理支払交付金を活用した取組を実施している活動組織等に普及することを目的に開催しました。



講師の説明を熱心に聞く参加者の皆さん



田園空間博物館について講演する松石事務局長

初めに、八戸市の島守田園空間博物館運営協議会の松石事務局長から、「地域に融合した島守田園空間博物館」と題して、同博物館の運営状況やふるさと水と土基金を活用したイベントの実施などについて御講演をいただきました。

続いて、県の担当者から、7つの新技術の内容を説明したほか、具体的な取組事例として、農業農村工学会の優秀技術リポート賞を受賞した「ハイ！アガール」開発の経緯や意義、土壌硬化剤を活用した排水路法面の安定処理に関する取組を紹介しました。

最後に、情報提供として、NPO法人あおもりふるさと再生機構（AFS）の船越理事長から、地域の資源、技術、人材を最大限に活用して、活力ある農山漁村の地域づくりを目指す同法人の事業内容について、活動事例を交えて説明がありました。

参加者からは、「我々の地域活動の中でも新技術の取組を行いたい導入方法を教えてほしい」との要望が出されるなど、充実した研修となりました。



AFSの事業内容を説明する船越理事長

■「環境公共」事例紹介

安兵衛地区(今別町) ～今年もヤマメの稚魚を放流しました～

今別川支流の安兵衛川にある頭首工には、魚道が設置されていなかったことから、魚類の遡上ができない状況でした。このため、平成20年度に地域用水環境整備事業に着手し、3箇所頭首工に魚道を整備し、平成23年度に事業が完了しています。



「きれいな水」の大切さを学習

事業実施中は地域の水利組合、内水面漁協、ボランティアグループ、町、県で構成する安兵衛地区環境公共推進協議会を設立し、今別川の水質調査や魚類調査を実施してきましたが、事業完了後の現在も、環境公共プロフェッショナルの澤田瑞穂さんを中心に協議会による「環境公共」の活動を継続しています。

去る平成25年6月10日には、今別小学校の1、2年生の児童と一緒に、今別川へヤマメの稚魚を放流したほか、山・川・海をつなぐ水循環と「きれいな水」の大切さについて学習しました。子供たちは、「大きくなったらこの川へ戻ってきてね!」と稚魚に語りかけ、元気に泳ぎまわる稚魚たちを見送っていました。

また、秋には、魚道における魚類の遡上についてモニタリング調査を行う予定としています。



今別小児童がヤマメの稚魚を放流

野外学習会「後潟水土里ふれあいの旅 2013」が開催されました

去る平成25年7月2日、青森北部、青森第二北部の両土地改良区の主催で、青森市立後潟小学校5年生20名を対象とした野外学習会が開催されました。この学習会は、水源林から学校田までの農業用水の流れをたどりながら、頭首工やため池などの農業水利施設の役割を学ぶとともに、水源林や「きれいな水」の大切さを理解してもらうことを目的に平成16年から開催され、今年で10回目を迎えました。



出発前の記念写真



ため池の役割を学ぶ子供たち

最初に訪れた左堰堤では、水源林から流れてきた水を溜めて農業用水として使用するため池の役割について学習したほか、環境公共プロフェッショナルの工藤智さんから、ため池に生息している生き物の名前や特徴を学びました。子供たちは見たことのない生き物に興味津々で、ナマズやアカハライモリなどをじっくり観察したり、素手で触れては歓声を上げたりしていました。

続いて、内堰頭首工を見学した後、下流の用水路で水質調査や濁度測定を行い、水のきれいさを実感しました。

最後には、子供たちが一番楽しみにしていたアヒルレースを通して、田んぼまでの水の流れを確認し、水土里ふれあいの旅を無事に終わりました。



ため池に生息する生き物観察



アヒルレースに熱中する子供たち



環境公共 通信

“地域づくりの新しいかたち” 環境公共



第19号 平成25年11月
発行／環境公共推進会議事務局
〒030-8570 青森市長島1-1-1
青森県農林水産部農村整備課内
TEL 017(734)9545 FAX 017(734)8153

■最近の話題

「環境公共」をテーマに農業農村工学会東北支部研修会が開催されました

去る平成25年10月25日、青森市のラ・プラス青い森において「農業農村工学会東北支部研修会」が開催され、県内はもとより、東北各県や遠くは近畿地方から合わせて約120名の研究者や農業土木技術者が参加しました。研修会では、「先代からの遺産、後世への継承～水・土・人を支える『環境公共』～」をテーマに、講演や事例発表が行われました。



研修会場の様子



北里大学の杉浦教授

はじめに、北里大学獣医学部の杉浦教授が、「稻生川開削からユネスコ未来遺産登録まで～受け継がれる開拓精神～」と題して、三本木原台地の開拓の歴史、一本木沢ピオトープやせせらぎ水路などの十和田市民による稻生川周辺環境整備の取組や、これらの取組のユネスコ「プロジェクト未来遺産」登録について講演を行いました。

続いて、環境公共学会の世永会長が、「地域づくりの新しいかたち～環境公共の取組～」と題して講演を行い、「環境公共」の概念、「環境公共コンシェルジュ」などの人財育成、環境公共学会を通じた情報発信などを紹介しました。参加者からは、「環境公共」のような地域での取組を推進する上でのアドバイスを求める声も上がりました。



環境公共学会の世永会長



十三湖土地改良区の江良総括課長

最後に、十三湖土地改良区の江良総括課長が、「環境公共」の現場での取組として、県営高根地区湛水防除事業による排水機場の整備を契機に設置された地区環境公共推進協議会の活動を紹介しました。農業の生産性向上のために事業を推進する一方で、小学生による水路での生き物調査や学習発表会、ワンドづくりなどの環境学習を通じて、地域の生物多様性や生態系を守ることの重要性を子供たちに伝えています。

今回の研修によって、県外の参加者に情報発信できたことで、「環境公共」の全国的な知名度の向上につながることを期待しています。

■「環境公共」事例紹介

ウスメバルの資源回復を目指して ～生息環境の保全・再生の取組～

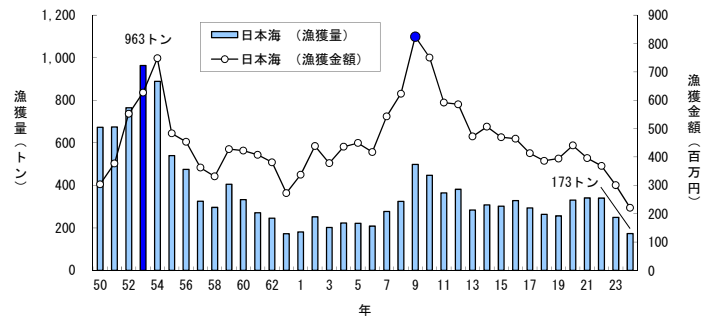
1 はじめに

メバル類のなかでもオレンジ色が鮮やかなウスメバルは、本県が全国の漁獲の約半数を占め、特に中泊町小泊付近で獲れるウスメバルは「海峡メバル」としてブランド化されており、県内のスーパーでは、1匹

1,000円近い値がつくこともある高級魚です。



ウスメバル



ウスメバルの漁獲量、漁獲金額の推移
(出典：未来を育む資源管理 2013 県水産振興課)

ウスメバルは、昭和53年には日本海での漁獲量が963トンありましたが、近年では200～500トン前後で推移しており、漁獲量、漁獲金額ともに減少傾向にあります。

2 ウスメバルの生態



青森県周辺でのウスメバルの主な移動経路

ウスメバルを含めメバル類は、メスの体内で卵をふ化させ、仔魚の状態産む「卵胎生」の特徴があります。春に日本海で産まれたウスメバルは、海面を漂う流れ藻とともに対馬暖流に乗って北上し、初夏には対馬暖流から分かれた津軽暖流に乗って陸奥湾や太平洋にたどり着きます。その後、陸奥湾内にあるホタテガイの養殖施設や太平洋沿岸の藻場などを住み場として成長し、成魚となって日本海へ再び移動します。

3 水産環境整備によるウスメバルの資源回復

ウスメバルの漁獲量は、ピーク時の約2割にまで減少していますが、その理由の1つとして、稚魚の住み場となる藻場の減少などの生息環境の変化があげられます。県では、水産生物の成長段階に合わせた環境を創出する「水産環境整備」という新たな漁場づくりの考え方に基づき、ウスメバルが成長に伴って移動する経路に稚魚を保護する藻場や、成魚の住み場となる魚礁の整備など、ウスメバルの生息環境を保全・再生し、資源回復を図る取組を進めています。



コンブの藻場に集まるウスメバルの稚魚

また、これらの取組をさらに進めるため、本年7月には、青森県、秋田県及び山形県の沿岸域における漁場づくりの基本的な考え方を定めたマスタープランを3県共同で策定しました。今後は、3県が連携してウスメバルの資源回復とともに、多くの水産生物が生息する豊かな海の環境づくりに取り組んでいくこととしています。



環境公共 通信

“地域づくりの新しいかたち” 環境公共



第20号 平成25年12月
発行／環境公共推進会議事務局
〒030-8570 青森市長島1-1-1
青森県農林水産部農村整備課内
TEL 017(734)9545 FAX 017(734)8153

■最近の話題

「青森県農林水産基盤整備推進セミナー」で「環境公共」を支える新技術を紹介

平成25年11月11日、青森市のウェディングプラザアラスカにおいて、青森県農村整備建設協会と青森県漁港建設協会の共催で「青森県農林水産基盤整備推進セミナー」が開催され、県内の建設会社や団体、行政などの関係者約200名が参加しました。

本セミナーは、先進的な施工技術や取組事例に関する講演、意見交換を通じて技術の研鑽を図ることを目的に行われたものであり、プログラムの一つとして、県農村整備課の担当者から、「環境公共」を支える新技術として実践・検証してきた、低コストの水田輪作体系を導入するための「地下かんがいシステム（フォアス）」、畑作物の品質向上・収量を増加させる「深暗渠」の概要と、これらの技術の更なる低コスト化に向けた実証・普及の取組状況などについて紹介しました。



セミナーの様子



新技術を紹介する県担当者

「攻めの農林水産業」10周年記念大会で「環境公共」をPR

平成25年11月12日、青森市の青森国際ホテルにおいて、「攻めの農林水産業」10周年記念大会が開催され、農林水産業の関係者や消費者など約300名が参加しました。大会では、県内において「攻め」の姿勢で生産や加工・販売に取り組んでいる優れた団体等の表彰や受賞事例の発表、記念講演が行われました。

会場には「環境公共」のPRブースを設置し、パネル展示や環境公共通信等の配布を通じて、県内の優良事例の取組などを紹介したほか、県産スギの間伐材を有効活用したコースターを展示し、希望者にプレゼントしました。

また、県内の建設業者3社が合同で開発した、「海のゆりかご」であるアマモ場を守りナマコなどの水産動物の棲みかとなる人工魚礁の模型を展示し、豊かな海の恵みを育む取組をPRしました。



記念大会の様子



「環境公共」PRブースでパネルなどに見入る参加者の皆さん



県産間伐材のコースター（手前）のほか、各種の木工品を展示



人工魚礁の模型



■「環境公共」事例紹介

第二南津軽地区(黒石市)～黒石花のみち運営委員会の取組～

1 地区の概要

黒石市西部に位置する第二南津軽地区は、秀峰岩木山を望み、八甲田連峰の清水に潤された美しい田園風景が広がる地域です。本地区は広域農道整備事業や農村総合整備事業により農道が整備され、地域農業の発展に寄与しています。これら農道の整備をきっかけに、平成18年3月に周辺の町内会等からなる3つの協議会を中心とする「黒石花のみち運営委員会」が設立されました。

委員会では美しい農村景観を保全し、地域の活性化と発展に寄与することを目的に活動しており、農村環境の保全を通じた「環境公共」の推進にも取り組んでいます。



今年度の植栽活動の様子

2 植栽活動

委員会では、平成18年から3年間で延長1,625mの農道沿いに合計7,700株のシバザクラの植栽を行っており、シバザクラの見頃となる5月の半ばには黒石市民だけでなく、農道を利用する多くの人々の目を楽しませています。

委員会の活動は毎年5月から8月まで、月2回ほどの割合で土曜日の早朝に行われ、特に5月から6月に行われるペゴニアの植栽には、市長をはじめ毎年多数の市民が参加し、その様子が地元紙にも大きく掲載されるなど、市恒例のイベントとなっています。

今年度はマリーゴールドとラベンダーを合わせて1,200本の植栽活動が去る6月1日に行われ、委員会のメンバーをはじめ、市長や市職員など約100人が作業を行いました。



満開のシバザクラ

3 今後の取組

本農道は、多くの地域住民がジョギングや散歩道として利用しており、シバザクラのある風景は大変評判となっています。委員会では、市広報等を利用して地区外の住民にも植栽活動への参加を呼びかけるなど、景観保全活動のPR活動も実施しています。

今後は、植栽の対象範囲を広げ、地域ぐるみでの更なる景観保全活動を進め、美しい花のみちを維持していきたいと考えています。



植栽活動後の集合写真